

〈書 評〉

小田部胤久 著

『美学』

(東京大学出版会 2020年)

田中 綾乃

常々、授業で『判断力批判』を扱う時の悩みは、導入のための適切な日本語解説書がないということであった。だが、2020年に上梓された本書は『美学』と題されているものの、内容はカント美学を扱っており、『判断力批判』第一部の鮮やかな入門書であり、解説書である。

10章からなる本書は、『判断力批判』の前半部である第1節から第59節までの構成に「正確に対応」しており、各々の章はA、B、Cの三つのパートから成立している。著者によれば、Aは「カントの議論を論理的に再構成」(p.4)しながら、著者の解釈を示したものであり、BはAにおいて扱った論点や概念について「時間を遡り、カントの議論の歴史的背景を明らかにする」(p.5)ものである。つまり『判断力批判』前史として、アリストテレスやバウムガルデン、バークなどの美学理論がカント美学にいかにか繋がっていくのかが語られるのである。逆にCでは、時代を下り、カント以降から21世紀に至るまで「カントの議論がいかにか継承され、あるいは展開してきたのか」(ibid.)について、ショーペンハウアーやハイデガー、リオタール、デリダなどの理論が論じられている。

著者は『判断力批判』をすぐれた古典とみなしているが、それは第三批判が「近代美学を基礎づけた」と同時に、「近代美学それ自体を批判しうるような視点も含まれている」(p.4)からだと言べる。古典とはひとえにそのような射程を持つものなのだ。こうして440頁にも及ぶ大著は、カント美学を中心に据えながら、カント前後の西洋美学史も網羅することができる。タイトルはシンプルに『美学』となっているが、この一冊がピアノ三重奏のような豊かな構成で織りなされ、多彩な魅力に溢れている。

ここでは紙幅の関係上、全てを紹介することはできないため、著者のカント美学の解釈において、とくに *ästhetisch* なあり方をめぐって独自の特徴が出ている箇所を紹介しよう。まず、第II章での『判断力批判』9節についての解釈があげられる。カントは、9節の前半では構想力と悟性の自由な戯れが快の感情に先行することを示し、後半ではこの「認識諸力間相互の主観的な合致をどのような仕方意識するようになるのか」(V 218)と問う。これに対して、カントは「美的に (*ästhetisch*) そうなる」と述べるのだが、著者はこの「美的な意識」に着目する。

著者は、カントが1節において趣味判断を下す主観が「自己自身を感受する (*sich selbst fühlen*)」と述べていることを踏まえて、この感受を「趣味判断において改めて自らの生命(生きていること)を内官によって感性的=感情的に意識する」(p.81)ことだと解釈する。ここから、この9節や続く12節の内容を「独自の〈自己意識〉論」(p.23)として読み解いていく。では、それはどのような自己意識であろうか。

著者によれば、美的な意識とは「心が認識諸能力の活動を、この活動が心に対して与える作用としての快の感情のうちに意識すること」(p.231)である。そして、趣味判断において認識諸力は相互に「生気づけ」、両者の活動は力を「強め」、そのような仕方自己を「維持する」ゆえに、かつ

この活動が心に及ぼす作用が前景化するために、人は改めて「自己の存在」を、あるいは「自らの生(きていること)を内官によって ästhetisch に(すなわち快の感情のうちに)意識する」(p.231f.)と言われる。

私たちがあるものを美しいと判断する際、心は構想力と悟性の戯れによって生き生きと生気づけられ、そのことによって自己の生が強められ、保たれる。つまり、何かあるものに美を感じるということは、その対象に向かうのではなく、むしろ自分自身へと向かい、自己を ästhetisch に意識することで、自己自身が再生産されるという事態なのである。

これまでカント哲学における自己意識の問題は「私は考える (Ich denke)」という統覚の問題として論じられてきた。しかし、著者はこの「Ich denke」という形式的な統覚のレベルでは決して顕在化することのない「人間存在の基底的な次元」(p.232)に「私は私を感じる (Ich fühle mich)」という独自の自己意識が存していることを指摘する。この視点は、カントの認識論的な自己意識論では見落とされていた点であろう。著者は、人間の生を「私は私(の生・存在)を感じる」という「感性的=感情的次元のうちに主題化した点に『判断力批判』第九節の意義がある」(p.81)と述べている。「Ich denke」の根底に存するような ästhetisch な自己意識の存在を示唆する著者の解釈は、統覚よりも感情に基盤を置くという点で議論にはなるものの、カントの形式的で論理的な自己意識論に対して、別の角度から光を与えるという意味で画期的である。

次にカント美学においても重要な概念である「美的理念(die ästhetische Idee)」における ästhetisch の内実についてである。著者はここでの ästhetisch について、第 IX 章において趣味判断における快不快の感情に基づく「感性的」という意味ではなく、崇高論の量評価に対しての「感性的」な意味として捉えている。ただし、崇高論と異なるのは「(悟性概念を拡張する)感性的なもの豊かなさ」(p.348)に関連づけて美的理念を解釈する点である。

カントにおいて美的理念は「多くを考えさせるきっかけを与えるような構想力の表象」(V 314)であり、「理性理念の対応物」(ibid.)でもある。構想力は「悟性が適合しえないほどに高められた感性として作用」(p.350)し、「悟性をその限界へと駆り立てることによって理性を働かせ」(p.351)、ある一定の概念に適合するのではなく、概念そのものを無制限に拡張する。著者はこれを「<高められた感性>あるいは<高められた感性>」(ibid.)と呼ぶ。

そして ästhetisch な理念を「感性的」ではなく「美的」理念と訳す理由として、「構想力の表象と一致する悟性概念を超え出た過剰としての概念が、悟性概念とは区別されて理性概念(理念)と呼ばれるのであれば、それに応じて、悟性概念と一致する感性的表象を超え出た過剰としての構想力の表象は「美的」と呼ばれるに相応しいであろう」(p.352)と述べる。

著者も指摘するように「美的理念」は『判断力批判』第一部の白眉ではあるが、第49節で突然登場するこの理念は「構想力の説明不可能な表象」(V 342)と言われるだけで、これをどう解釈すればいいのかについて、カントの説明はあまりにも不十分である。その点を著者は、ライプニッツの「微小表象」論の系譜に遡って考察する。たとえばバウムガルテンは「微小表象」を自らの美学における「含蓄のある[多くを語る・印象深い・多くのものを懐胎した]表象」(p.365)に組み込むが、著者はその論を用いてカントの美的理念の解釈を補填しようとする。なるほど、普段、意識することのない表象や「曰く言い難いもの」と呼ばれる「微小表象」を魂の根底にとどまる多くの暗い表象として捉えるバウムガルテンの論を援用すると、カントの「美的理念」の内実はイメージしやすくなる。実際に私たちが芸術作品に対峙すると、それまで意識していなかったことに気付かされ

たり、あるいは昔の忘れていた記憶やまだ見ぬ情景を思い浮かべたりするという経験は多々あることだ。それゆえ「遠近法的展望」をもたらす「含蓄のある表象」と自身を拡張するような「美的理念」との間に共通点を見出すことができるのである。

このように「美的理念」は多くのことを考えさせるものだが、同時に経験を超えた理性理念と類似するものでもある。特に59節の象徴論につながる「超感性的なものの感性化」をカントが目指していたことを考えると、「美的理念」はやはりカント特有の超越論的な概念である。このことは著者も承知の上で、バウムガルテンやマイヤーとカントとの間の根本的な相違は、前者には「悟性と感性の対立が欠けている」(p.367)点だと指摘する。この問題はさらに深く考察する必要があると思われるが、カントが十分に説明しなかった「美的理念」や「超感性的なもの」をめぐって、これらの概念にどこまで豊かな肉付けができるのか、という点が第三批判を読み進める醍醐味なのかもしれない。

さて、『判断力批判』の骨子である「自然概念の領域から自由概念の領域への移行」(V 176)をめぐる議論は、前半部最後の59節「道徳性の象徴としての美について」で集約される。著者はすでに『象徴の美学』(東京大学出版会、1995年)において、ライプニッツからヘーゲルに至るまでの象徴概念を精査し、カントの象徴論もここで詳細に論じられている。したがって本書第X章のAでは『象徴の美学』での論が簡潔にまとめられており、なぜ美が道徳性の象徴になるかといえば、「美はその自律性にもかかわらず道徳性の象徴であるのではなく、まさにその自律性ゆえに道徳性の象徴である」(p.409)からであり、道徳性の象徴であるということは「美それ自体に内在的に備わった規定性」(ibid.)であることが結論づけられる。この内在的な規定性とは、美そのものが「移行」を孕んでいるということである。

この「移行論」を踏まえて、Bではバウムガルテン学派の「認識の美的生命」による認識能力から欲求能力への移行、Cではシラーの「美的生」による他律性から自律性への移行が論じられている。この結論が示しているように、本書が一貫しているスタンスは、美(芸術)と人間的生の関係という著者のまなざしであろう。カント自身も『判断力批判』の冒頭で、あるものを美しいと判断するのは「主観の生命感情に関係づけられる」(V 204)と述べ、生き生きとした感性(感情)で美を感じ取ることが考察の出発点となっていることから、美や芸術を愛する者として著者の生へのまなざしには大いに共感できる。だが、『判断力批判』前半部末尾で、道徳的善の象徴としての美が語られる場合、美には叡知的根拠も含まれることを顧慮すると、著者の視点がいささか感性重視であって、超越論的な側面が薄れてしまうようにも思われる。

さらに象徴を知的直観の代替物とみなすならば、第三批判後半部の76節や77節の直観的悟性の問題と59節との関連についても体系的な解釈が可能である。個人的には著者のさらに進んだ解釈を見てみたいという思いがあるが、それは私たち自身にも課せられている問題でもある。

いずれにしても本書において、『判断力批判』には汲み尽くすことのできない豊潤なテーマが散りばめられていることを示したという点で、これは単なる解説書に留まらず、今後のカント美学の発展的研究においても大いなる示唆と応答可能性を開くことになるだろう。